

# 村芝居

徳丸文化部長 仙波規孝

10年くらい前より、祭の世話をしないうかという話をいただき、20人くらいで話し合い、祭実行委員会を立ち上げました。そして、次の年に大御輿を大字の皆さんに買っていただきました。

してあげたいと思ひ、大字の方や宮総代の方に相談をし、了解をもらい復活をしました。

平成8年5月の実行委員会で、皆が子どものころ青年団の方々が、楽しそうにやっていた村芝居を始めたらという話になりました。お年寄りや大人の方には、なつかしい素人芝居を楽しんでいただきた。また、子どもたちには、私たちが、昔、楽しみにして見ていたように、よい虫干し祭(輪越し)の思い出を残

始めるに当たって、芝居を教えてもらう師匠を探したり、キャストやスタッフで20数名集めなければならず、みんな

で走り回って6月中旬から、演題「瞼の母」の練習を始めました。練習に入ってみると、初めてのことなので、わからないことが多く師匠に聞きながら練習をしました。小道具などは、婦人部の方や徳丸みどり会の方々に作っていたり、今までの舞台が小さいので、木材は製材所で寄附していただき、幕は他の地区から借りて、やっと公演することができました。



▲仁義あり……

2年目は、「任侠 吉良港」を演じました。3年目には、自分たちの幕が欲しいと思ひ、布は寄附していただき、徳丸みどり会の方々に幕2枚を縫っていただきました。演題は「名月赤城山」、4年目は「大利根月夜」、5年目は「森の石松」、6年目は「恩愛しぐれ



▲涙あり……

笠」を演じました。「名月赤城山」では、小学生の姉弟や「瞼の母」「森の石松」では、中学三年生の女の子が出演してくれました。9歳から54歳までの幅広い年齢層が集まり、早くも6年が過ぎました。これも地域内外の皆様のご支援、ご協力のお陰と感謝いたしております。

今年2月19日(火)には、思いがけない愛媛県コミュニティ推進協議会伊予地方協議会長より表彰状をいただき、身の引き締まる思いで、これからも文化部長一同一丸となって、楽しい芝居を続けていく所存です。

今年も8月2日(金)には、昔懐かしい芝居を行いますので、町民の皆さん、一度観てください。

# 人権・同和教育資料館を訪ねて

北伊予小学校人権・同和教育主任 渡部明代

人権・同和教育シリーズ 第234回

自分の問題として

本年3月、大阪にある「堺市立船松歴史資料館」と「大阪人権博物館(リバイイ大阪)」を訪れる機会を得ました。船松歴史資料館では、厳しい差別のなかでも、下駄や雪駄などの履物の製造・販売を主な仕事として力強く生きてきた

差別は本当になくなるのか、と聞く方がいます。あるいは、差別は永遠になくならないよ、と冷やかに言う方がいます。でも、私はそんなことを言う方に尋ねたいのです。あなた自身は、どうなのですかと。

方々の生活の様子を実物大模型で再現していました。この地区の出身で将棋でおなじみの阪田三吉の遺品も展示されていました。三吉が実際に履いていた雪駄や使っていた将棋の駒を見ていると何かあの

問題で第三者的に眺めるのではなく、自分が差別する側で生きるのか、差別しない側で生きるのか、が問われているのです。

「王将」の歌が聞こえてくるようでした。また、人権博物館には、西光万吉記念室があります。西光万吉は、水平社宣言を考えた方です。この水平社宣言は「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で

差別はなくなるのかと聞いたり、差別は永遠になくならない、とあきらめるのではなく、差別をなくそう、自分は差別しない、と決意してほしいものです。

と呼ばれるいます。この訪問をとおして、差別の歴史を正しく理解し、差別の現実から学ぶという人権・同和教育の原則の大切さを、あらためて痛感しました。

私たち一人ひとりが「生きがい」「学びがい」「働きがい」を実感できる豊かな差別のない生活が実現できるよう、今年度も「いつでも・どこでも・だれとでも」を合言葉に心を磨き合おうではありませんか。

今年も8月2日(金)には、昔懐かしい芝居を行いますので、町民の皆さん、一度観てください。

自分自身は、どうなのですかと。問題で第三者的に眺めるのではなく、自分が差別する側で生きるのか、差別しない側で生きるのか、が問われているのです。